

## 子供の課題、親の課題、そして教師の課題

野田俊作（大阪）

\*守口市教育研究所における講演

### 要旨

### キーワード：

はじめまして。野田でございます。もともと本職は精神科医ですが、専門分野が児童・思春期医学でしたので、病院勤務の時は神経症や精神病の中学・高校生も診ておりました。中央児童相談所の嘱託や家庭裁判所に勤めるようになり、神経症の子どもから、非行や登校拒否の子どもにも関わるようになりました。現在は、新大阪駅の近くの事務所で、カウンセリングを中心として約5割が登校拒否、3割が非行、残りの2割が神経症か精神病状態の子供やその親を対象に心理治療相談を行っております。また、そこでカウンセリング講座を行っており、学校の先生方もお見えになって下さるので、先生方とのお付き合いも割と多くありました。

今日は、カウンセラーの立場からではなくて、毎日のクラス運営、クラスマネジメントの中でどんなことができるかについて、学校の外側にいる者としてお話しをしたいと思います。

勿論、個々の問題を抱える親や子供に対するカウンセリング的アプローチも大切だと思います。しかし、その前に、先生方にできることが沢山あるのではないかと常々思っているのです。私は口が悪いのでよく言うのです。「登校拒否や非行の子どもに対するカウンセリングの仕事は学校の先生方の尻拭いだ。学校がちゃんとやってくれれば、我々は殆んど仕事がなくなる。この仕事がいっぱいあるのは先生方のお陰です」と。

### <誰の問題か>

私は、登校拒否や非行のシンポジウムに参加してお話をすることがあります。先生方の集会では、「子ども達の問題は親の責任だ、親が悪い」の大合唱です。親だけのシンポジウムでは「学校が悪い、教師の責任だ!!」となります。教師と親の集まりでは「それは、社会が悪い、政府が悪い、行政が悪い」と言った方向に話が進むのです。私は、その時、気付いたのです。要するに「誰々が悪い」と言うのは「私は悪くない」ことを言いたいだけなのです。それは無責任な態度だと思います。

学校の先生方が、子どもの学校での行動を見て、「親の家庭教育が悪いから、こんな問題行動を取るのだ」と言うのはちょっとおかしいと思います。確かに、親の対応がまずいかも知れませんが、それならばこそ、先生方がその子どもにしてやることが増えることはあっても減ることはないのです。親にその子を見てやる能力がないのであれば、先生方が見てやらなければ、

一体誰が見るのですか。親が悪いということは、私はもっと仕事をしなければいけないということであって、私の責任ではない、私の仕事ではないという意味にはならないし、子どもが学校で悪い行動をするという説明にもならないのです。親が悪ければ、家庭内暴力をやります。人間は相手によって行動を変えるのです。ある人に対してその行動をとるのであって、何もない空中に向かって非行をやったり、登校拒否をするのではないのです。いつも、誰々に向かって非行を取り、登校拒否を行なうのです。例えば、学校で子どもが暴力を振るうとか、そこまでいかなくても、授業中に勉強をしないで騒いでいるとかであれば、学校という環境に反応しているのです。だから、学校という環境を改善しないと、その子の行動は止められないのです。

先生方は、授業中に騒いでいる子の親に対して、割と平気で「家での躾はどうなっているのですか？ お父さん、お母さん、しっかり家で躾をして下さい」と言われます。逆に「あの子は、夜深しをしてなかなか寝付きません。これは学校の教育が悪いからです。先生、何とかして下さい」と親が言えば、「それは家庭の問題です」と言われるでしょう。それと同じで、学校で騒ぐとか、勉強しないとかは、それは学校の問題であって家の問題ではないのです。今、その問題を解決しようと思えば、その問題行動が起っている場所を見定めて、その場所のあり方を変えなければならぬと、私は基本的に思っているのです。

昔、校内暴力のはしりの頃には、今でもあるのですが、典型的な校内暴力は、家では割とおとなしくて、学校の中だけで暴れるのです。しかし、学校を卒業して一般社会に入ると非行があるかと言えば、そうでもないのです。反対に、家庭内暴力児は、家の中では暴れますが、学校では何をしているか分からない程おとなしいのです。

学校でおとなしくて家で暴れる子、家でおとなしくて学校で暴れる子、その間には同じ子どもだからつながりがあるかも知れないが、家の行動が変われば学校の行動が変わるということはないのです。学校での行動を変えようと思えば、学校が対処しなければいけないし、家庭での行動を変えようと思えば、家庭が対処しなければならぬのです。そここのところの視点をはっきりさせないと、教師の悲観主義というか、家が悪い、友達が悪い、だから我々はどうしようもないのだという病気に学校がかかるのです。

家庭が悪ければ悪い程、「精いっぱいやろう」と積極的に出て欲しいのです。我々、カウンセリングや精神医療に従事している者が対応している患者さんは、家庭的に恵まれておりません。でも家庭が悪いからどうしようもないとは言いません。家庭の状態が悪いのであったら、「せめて、私に出来ることをしてやろう」、これが基本的な発想です。家庭背景に問題があればある程、私には、「この子にしてやれることが沢山あるのだ。親がしてやれなかったことを私がしてやらなかったら、この子は一生いい大人と出会うことがない。社会でちゃんとした生き方を学ぶ機会がない。だから今、私が教えてあげるのだ」と決心をするのです。

## <教える権利>

そのように考えますと、今学校は必要以上に学校外の子どもの出来ごとに介入し過ぎているように思います。例えば、私の子どもが近所のお菓子屋さんの自動販売機から、おもちゃを買っているところを先生が見ておられました。先生は、本人に注意したり、学級懇談会の時、親である私に「お宅の子どもさんは、自動販売機に行くので困ります」と言われたのです。私は、懇談会は担任の先生を再教育する絶好の機会だと思っておりますのでよく参加します。その時、私は先生に言ったのです。

「それはおかしい。学校の中での子どもの生活については、先生方にお任せしております。先

生の方針で自由にして下さい。しかし、放課後、子どもが家でどのように暮らすかは、親の監督下にありますので先生に介入していただくなくても結構です。私は、子どもが自動販売機で物を買うことについては特に問題を感じておりません。彼が自分のお金をどのように使おうと、それは彼の責任の範囲であって我々がそこまで介入すべきではない。私は子どもの行動を信頼しております。」と。先生は、「それは、おかしい」と言われるのです。

このような時、私は、学校がどこまで子どもの行動について責任を負うことができるのか、あるいは、根本的に教育の権利や義務は一体どこにあるのかといつも考えるのです。昔は登校拒否の子どもに対して、先生方は「義務教育だから、学校へ出てくるのは君の義務だ」と言っていたものです。しかし、教育の義務があるのは、親や政府であって、子どもには教育を受ける権利があるだけです。親や学校は、適切な教育環境を整えて、彼らが教育を受ける権利を十分に行使できるように準備してやる義務があるのです。教育の義務は、学校にあって子どもにはないのです。子どもが学校へ行く権利を放棄して、「私は学校へ行かない」と言えば、権利、責任上どうすることもできないのです。登校を強制することはできないのです。納税の義務とか、教育の義務は成人層にあるのであって、子ども自身が何かの義務を負うと言うのは法学的にもおかしいのです。

では、教育をする義務というものは、親にあるのか、学校にあるのか？それは、憲法によれば親にあります。ということは、子ども達を教える権利は親にあるのです。学校はその権利の一部を親から委任されており、下請けをしているだけです。

私は、このような仕事をしている都合上、一般企業の社員研修の講師を頼まれることがあります。ほとんどは、お断りするのですが、参加した折には、企業側の考え方を勉強させて貰うことがよくあります。割と参考になることが多いのです。いちばん勉強になったのは、「お客」という問題です。例えば、お店にとってお客さんとは、店に来て買い物をしてくれた子どもだけではなくて、その子どもにお金を渡した両親、その親たちが作っている社会までも含めてお客さんと考えているのです。要するに、問屋さんを含めて、付き合いのある範囲の人のすべてがお客さんなのです。そして、それらのお客の機嫌を取り、お客のニーズに応じて商品を揃えるのが商売の基本になっているのです。ところで、先生方は少し傷つくかも知れませんが、学校も一種の職業ですから、企業であると考えられます。では、学校のお客さんは誰で、そのニーズは何でしょうか。

学校には、基本的に4種類のお客さんがいます。まず、子どもがお客さんです。先生方は、自分のクラスの子どもさんがお客だと思っただけですか。学校を企業だと思えば、これは大切なお客さんなのです。それから、子どもの後ろにいる親、これもお客さんです。そして、親達で作っている社会もお客さんです。社会の元締めは国家、これもお客さんです。つまり、子ども、親、一般社会と国家組織が、学校のお客さんになります。だから、学校という企業も、これらのお客さんのニーズに合わせてサービスを供給しなければならないのです。こう言うと、先生方は、どうして学校側がサービスを供給しなければいけないのかと不思議がられると思います。でも、業種分類をすれば、学校はサービス業です。我々医者も、統計ではサービス業です。飲み屋の女将さんと同じくお客さんを大切にサービス精神を勉強しなければならないのです。昔のように威張っている医者は、段々減ってきています。医学部の教育にも、病院管理学とか医療サービスなどの用語がでてきます。いかにして、患者さん方への医療サービスを向上させるかが、今日の医学の大きなテーマなのです。教師も公務員ですから、住民に対するサービス、親や子に対するサービスが一番根底にある仕事なのです。そして、それらの人々のニーズに応じて、サービスが行なわれなければならないのです。ニーズのないサービスは意味がありません。

## <国のニーズ>

では、親や子ども、社会や国家の学校に対するニーズは何か。まず、日本国家が学校教育、特に初等中等教育に何を期待しているのか。これは、教育基本法の前文、及び第一条、第二条あたりにはっきりと書いてあります。要するに、国民が民主主義国家を維持するだけの基礎的な教養を持っているように、ということが、初等教育に要請されている一番大きなものなのです。

封建時代や独裁国家では、支配層だけに知識があって、住民は無知であればある程支配されやすいのです。民主国家は、民衆に、今どんな政治が行われ、政治家達は何をしているのか、これから自分自身はどうしていけばいいのかと、一人ひとりの自覚がないと維持できないのです。一つの実例があります。ワイマール共和国という大変民主的な国家では、その民主的な憲法の手続きを踏まえた上でヒットラー政権が成立し、法手続きに従って国会がワイマール憲法を停止し、完全独裁国家になったのです。これは、法的には、何ら問題はないのです。つまり、国民が愚かであれば、民主主義は、民主的手続きによって簡単に崩壊していくのです。

今、我々の学校教育は、子ども達が、私達は民主主義の法治国家であるこの国に生れて良かった、自分達も大きくなったらこの国が益々民主的であるようにと決心するような教育が行なわれているのでしょうか。はっきり言って、このような教育は行われていないと思います。ある悲惨な実例をお話します。私が相談に当たっていたある非行の子どもがいます。彼は、中学1年生の時、5人組でつい遊び心からスーパーマーケットで万引きをしたのです。そのことが、生活指導の先生に見つかったのです。先生は、バットで殴り、全員の頭を丸坊主にしました。全員の母親を呼び出し「あなた方の家庭での躾が悪いから万引きをしたのです。あなた達も子どもを殴りなさい。」とバットを渡したのです。親達は、泣く泣く2～3回殴ったのです。そして、子ども達は、先生に明日から朝早く登校して、罰として校門の清掃をすることを約束させられたのです。

帰る時、一人の母親は子どもに「ごめんな、お母さんは殴る気はなかったのだけれども、ああしないと、先生は、もっと怒ってお前を殴っただろう」と言ったのです。事実、それまでに、先生から、子どもは、口から吐く程に殴られていたのです。子ども達は、「あいつらは、暴力さえ振るえば、自分達が言う事を聞くと思っている。これからは、そうでないことを見せてやる。」とかんかんに怒っております。実際、その後、この子ども達はもの凄く悪くなりましたが、その処置のまずさは別として、これが民主的な法治国家を維持する決断を与えるための初等教育の構造でしょうか。

例え万引きをした人に刑罰や体罰を与えるにしても、根拠になる法律がないと駄目なのです。罪刑法定主義と言いまして、どんな悪い人でも、日本国の刑法に書かれていない罰でもって、処罰することはできないのです。仮に、生活指導の先生は、子どもが万引きをしたらバットで殴っても良い、という校則があればまだ分らないでもありませんが、そんなものがある訳がありません。もし仮にあったとしても、その校則は日本国の法律に反していますので、自動的に無効です。ましてや、生徒を丸坊主にする権利は全くないのです。生徒をバットで殴り、丸坊主にし校門の清掃をさせた中で一番問題になるのは髪を切ったことです。髪であれ、爪であれ、本人の同意を得ないで切りますと、これは訴えれば傷害罪にあたります。とにかく、法を無視して処罰すると、それはリンチになるのです。日本国民は、リンチをする権利はないと憲法で明示されているのです。子ども達は、今の学校の中では、民主主義国家としての法律が守られているとは思っていないのです。学校は、最も民主的な場所で、そのモデルにならなければいけないのです。リンチがあってはいけないし、体罰が通用する世界ではいけないのです。そう言った意味で、学校は、日本国家が要請しているニーズを満たしているとは言にくいのです。

## <社会のニーズ>

今の子どもは、昔と違ってほとんど親の職業をつぎません。多くの子ども達が親元を離れて別な組織社会の中で働くことになっているのです。この国の伝統的な育児とか教育は、子ども達が親と同じ職業について、親と同じように生きて、親とつき合っていた人と同じような人とつき合っていた時代には、それなりの水準にあったのです。現在の社会は、親元を離れていく子ども達が、その行き先で十分適応できるような人間に育成されていることを教育に求めているのです。新卒の医者の中には、夜勤の時、患者に緊急事態が起っても、その指示事項以外の状況に出会うと咄嗟の判断ができない人がおります。入院されているおばあさんが、喉にモチをつめて苦しんでいるのを目の前にしても、カルテに書いてある緊急時の指示事項以外のことをすると「怒られる」という理由だけで、例えその処置を知っていても動けないのです。国立大学の医学部を卒業するような人は、小学校から優等生です。でも、でき上がった製品はこれなのです。今の教育システムでは、自分で考え、自分で判断して、自分の責任で行動するということを学ばなかったのです。彼らは、マークシート方式の〇×試験にはとても強いのです。思考でもない、論理でもない、直感で自分の知らないことまで正解にして答えるのです。多くの企業では、新採用者を徹底的に再教育しなければならないのです。次第に、社員教育や研修の必要性が上がってきているのは、学校教育が社会のニーズを満たしていない一つの証拠です。

## <親のニーズ>

親が学校に何を期待しているのかを考えたことがありますか。勉強させることではないのです。勉強させることを学校に期待しているのであれば、塾という産業は存在しません。親が学校に一番期待していることを虚心坦懐に考えてみると、大きな理由が一つあったのです。それは昼間、学校が子どもを預ってくれることです。そのことで、大人の生活は随分助かっているのです。だから、親のニーズもやっぱり尊重しなければならないのです。子ども達が気持ちよく学校へ来てくれるように、学校は配慮しなければならないのです。先生方も、親の立場で考えれば、子どもが学校へ行くのを嫌がるようなことを、学校や担任がしないで欲しいと思うでしょう。子どもが安定した状態で登校している時は、そこまで考えませんが、問題が起った時は親はそう思います。

## <子どものニーズ>

私は、子ども達が一体学校に何を望んでいるのかを学校が考えたことがあるのかと不思議に思っております。彼らが学校に望んでいることは、彼らの知識欲を満たしてくれることです。私は子ども達は基本的に勉強が好きだと思っております。学校や御家庭で御不用の生徒達ばかりを集めて見ていると、彼らはもの凄く勉強好きなのです。なぜ、彼らは勉強嫌いになったのですか。一言で言えば、先生方が教える方法をあまり工夫されなくて、子どもの知識欲を挫いているからです。どうも先生方には、勉強は苦しいものだ、その苦しみを克服して学ぶものだという思い込みがあります。そんなことを思っていたら苦しくなります。勉強は、楽しくてしかたがないもので、それを挫かないかぎり子どもは絶対に学ぶものです。入学したばかりの小学一年生の目はギラギラしています。一体、誰が悪いのですか。

私は、塾の先生方の集りにも時々参加しますが、彼らはいろいろと工夫しております。向うは

企業ですので、子ども達に逃げられたら困ります。教え方を工夫して、業績を上げないと駄目なのです。学校の先生方はプロです。塾の先生方は、言わばアマです。アマの方がプロより教え方を工夫しているのであれば困ります。先生方は、プロとして自覚を持って、子ども達の方から学ぼうとする意欲を起こさせる場を作るのにどうすればよいか常々考えていただきたいのです。

私が、小学校1、2年生の時に経験した担任の先生のことを少しお話します。

その先生はこんな教育方針でした。私が何か答えますと「教科書にそのように書いてありましたか、それは違います。先生はそのように教えましたか、それは違います」と言われるのです。私は、教科書に書いてあることや、先生の言ったことをそのまま覚えこむよりも、自分で一生懸命に考えて、こうではないかと思うタイプの子もだったのですが、「本にこう書いてあるでしょう…」とやられるので、自分は勉強ができない子だと思ってしまったのです。

ところが、3年生の若い担任の先生は、「おっ!! 野田はそう考えるのか。おもしろい考えやな。でもな、普通はこう考えるのだよ」と言われるのです。これには大変勇気づけられました。他の人がどのように考えているかを知ることは、とてもいいことです。と同時に、みんながそのように考えるからと言って、自分の考えを絶対にそれに合せなければならないこともないのです。自分なりに考えてもいいのです。でも、多くの人が、こう考えているということは知っておくべきです。教育とは、「こう考えるべきだ」というのではなくて、「普通はこう考えています」ということを教えることです。それ以後、私は勉強が好きになりました。ちょっとした声かけで、子ども達は変わっていくのです。このようなことは沢山あるだろうと思いますが、どうして先生方は、もっと研究されないのでしょうか。

例えば、学校の先生方とお話しておりますと「クラスに宿題を忘れる子がいます。どうしたらいいでしょうか。落ち着きのない子がいます。非行の子がいます。どうしたらいいですか。」とよく言われます。私は、その時「他にちゃんとした子はいないのですか。その子らにはどうしていますか。」と尋ねます。「います。学校にちゃんと来て、ちゃんと座って勉強するのは当たり前ですから、その子らには何もしていません」と言われるのです。ということは、宿題を忘れたり、何か問題を起こしたり、非行化すると子どもは、先生と特別なつながりができるのです。勿論、一生懸命勉強して、成績のよいことで先生とつながれる子どもはそれで満足します。先生といい関係でつながるのが無理だと思った子どもは、無視されるよりも、先生が好きであればこそ、悪い関係でもつながった方がいいと考えるかも知れないのです。誉められたり、認められたりするのが一番いいのですが、それが駄目だったら叱られたり、けなされたり、罰せられたりしてても、先生とつながりがある方がいいと子どもは考えるのです。人間として一番辛いのは、無視されて関係が断たれることです。先生方も、職員室に入って、「お早ようございます。」と言ってもみんなが知らん顔をすると辛いでしょ。

子ども達が具合の悪い行動をした時、先生が叱るという行動は、その悪い行動に餌を与えていると私には思えます。「今まで、散々、いろいろな手立てをとりました。注意もし、殴りもしました。にもかかわらずあの子は、ちっとも良くなりません。」とおしゃるのです。これは、根本的に認識が間違っているのです。そんなことをするからこそ、口酸っぱく注意をし、家庭訪問をして親に小言を言ったりするからこそ、その子は良くなるのだと、一度考え直してみるのです。人間の行動は100%対人関係です。非行であれ、登校拒否や宿題であれ、忘れものであっても、みんな対人関係です。それを見逃すと全部処置を誤るのです。

## <自分の居場所>

子ども達のもう一つのニーズは、学校やクラスの中に自分の居場所を見つけることです。勿論、家庭の中でも、自分の居場所を見つけたいと思っています。心理学では、この居場所を見つけることに失敗した子どもが問題を起こしていると考えております。学校で問題を起こす子どもは学校で自分の正しい居場所が見つけられないのです。家庭で問題を起こす子どもは、家庭の中で、自分の居場所が見つけられないのです。この子どもの居場所を見つけたいというニーズも、やはり学校は満たしてやらなければならないのです。子どもがクラスの中で自分の居場所を見つけるニーズについて考えると、子どものいろいろな問題行動が理解できるのです。

では、子ども達は、どのようにしてクラスの中に自分の居場所を見つけるのでしょうか。それは、まずクラスメイトといい関係を持つことから始まります。しかし、この友達といい関係を持つという中に、必ず教師が一枚かんでいるのです。なぜ教師がかんでいるかと言えば、今の学校は競争原理だからです。先生方は、子ども達をどうしても競争させるのですね。私は、この競争させることのメリットがどこにあるのかよく分らないのです。

この競争に関して、アメリカでは、沢山の実験があります。例えば、成績が標準分布になっているクラスの子ども達を、競争させないで上手に育てますと、同じ分布で成績のレベルが上がります。しかし、この子ども達を激しく競争させますと、上位の成績の子どもはよく伸びます。下の子の方は、却って伸びません。結局、標準偏差がやたらと広がります。平均点を比較すると、競争させない方がみんな伸びますので、競争させたクラスよりも良いのです。このような実験結果は、心理学の分野ではいくらでもあります。学校の先生方は、このようなことをポロッと見落して、なぜあんなに競争ばかりさせるのでしょうか。

先程から、学校を企業に例えてお話しておりますが、学校は工場である、とも考えられます。学校という工場の製品は何でしょうか。それは、子ども達です。工場経営で一番大切なことは、不良品を作らないことです。今、学校での不良品率はいくらぐらいになるでしょうか。なんとか学習に追い付いているのを良として、1科目でも落ちこぼしているのを不良品とすると、中学校での不良品率は2/3ほどになるでしょうか。まあ、1/5としてみても、20%の不良品率です。民間の工場で不良品率が20%になれば、工場長は即刻クビです。100個のうち、1個の不良品があったとしても、工場として機能していないのです。中学校に入ってくる原材料は、そんなに悪くないのです。工場が悪いとしか言いようがありません。これだけの不良品を作り出しておいても、校長先生がクビにならないのが不思議でなりません。やはり、不良品率ダウンの工程管理学を徹底的にやって貰わないと困ります。2人の子どもの親としての私は、学校の株主です。また、納税者としても、学校に対して不良品率を下げて欲しいと発言する権利があります。100人中、1人の落ちこぼれは、まあ辛抱します。100人に10人も20人も落ちこぼれがあれば、こんなことでは教育しているとは言えないのです。

結局のところ、子ども達は過度の競争をしかけられているのです。いろいろなことに対して、君はいい、君は悪い、と絶えず評価を教師から与えられているのです。その結果、クラスの中がどうしても親教師組と反教師組に分かれるのです。こうしてクラスの中で子どもの居場所が、教師の存在と関係してくるのです。子どもは教師の御愛顧という賞品を賭けて競争するのです。ある者は、その賞品を手に入れますが、ある子どもは途中で手に入れるのを諦めてしまうのです。私は、先生のお気に入りという形でこのクラスの中に望ましい居場所を確保することができないと思った子どもが問題なのです。そうでない形で自分の居場所を見つけないとみんなから軽く見られてしまうのです。

## <ある事例>

ある一人の登校拒否の子どもがいました。この子は、小学校から中学1年生の1学期までの成績は中ぐらいでしたが2学期から急激に成績が下がったのです。中学校では、この時期から各教科内容は、急激に抽象化してくるのです。昔は、12才から13才で身につけていた形式操作能力が、テレビなどの影響なのか、その発達が遅れているのです。小学生の九九も同じですが、発達心理学的な根拠を無視してカリキュラムを作っているから、中学に入ると急速に勉強についてゆけない子どもがふえるのです。

この子は、2週間ほど学校を休んだ後、自分から学校へ出て行ききました。しかし、おとなしなかったその子が、学らんを着て頭髪を脱色して、いわゆるツッパリルックで登校したのです。担任の先生と生活指導の先生は、ブツたまげまして、「おとなしい子やったのに、何という格好で学校に来たのや。お前、もう帰れ!!」と言ったのです。ところがこの子は、平気で教室に行ったのです。その後、この子は教室を出たり入ったりする状態になり、校内をねり歩いている内に仲間もできて、夏休みには、他校の生徒との出入りに一枚かむようになるまでに成長していったのです。遂に児童相談所から家庭裁判所送りになったのです。普通、中学3年生では保護観察はつかないのですが、次に何かしたら少年院へ送ろう、ということで保護観察になったのです。それ程、行状が悪かったのです。

中学校の卒業式には、何とも言えない華やかな格好で出席してくれました。あの子は、「卒業したらパンクするで!! 今度、家裁へ来る時はきっと面白い格好で来るよ」と待っておりますと、髪はそのままですが、普通のジーパン、Tシャツで来所したのです。鑑別所に入った時も、調査官が「そんな格好で裁判に出ると、裁判官の心証が悪いから丸刈にするとか何とかしたら」と言っても聞かなかったこどもです「君、どうしたのや。面白い格好で来てくれると思っていたのに」と言うと、「中学卒業したら誰も怒ってくれへん。怒ってくれないのに変な格好していたら、ただのアホや」と言うのです。そして、ツッパリルックではじめて学校へ行った時は、担任の先生や生活指導の先生に無茶苦茶に叱られた。小便ちびるぐらい恐かった。しかし、ここで負けたら二度と学校へは行かれないと思って頑張った。そしたら、クラスの友達目が変わった。成績が悪くなって皆んなからいじめられ、軽く見られていた自分がツッパッているお陰で、「あいつは根性がある」と尊敬されるようになった。非行仲間からも声をかけられるようになったと言うのです。

もし、君がツッパッて登校した時に、「先生が『変な格好できたな。しかし、まあ、よう来てくれた。家に引っ込んでいようより、学校へ来てくれる方が先生は嬉しい!!』ぐらいの事を言われたら君はどうする?」と尋ねると、「そう出られたら困る」と言ってしばらく考えた後「2週間ぐらいはツッパッて登校しているだろうけど、段々と元に戻ったやろ」と言うのです。その後、1年間この子と付き合いましたが彼は完全に立ち直りました。どのようにして立ち直ったか、少し今日のテーマと離れますがお話しておきます。

この子は、保護司、調査官や親が「就職しなさい」と言っても、卒業後は就職しなかったのです。私も2~3回言ったのですが、それ以上は言わなかったのです。親は諦めずに言っております。ところが、7月からファミリーレストランの皿洗いのアルバイトに行きはじめてののです。夕方5時に家を出て、10時頃に帰ってくるのです。その後、9月になって、その子の友達から、実際にはアルバイトへ行ってなくて、夕方になると友達の家をブラブラ歩き、お金を借りて、御飯まで食べさせて貰っていることが分ったのです。保護司は、この子に一発雷を落とそうとしたのですが、私は「あの子のことやから、絶対に訳がある。怒るのを止めて、話を聞いてみよう」と言ったのです。

聴いてみるとなかなか面白いのですね。「母親から『働け！働け！』と言われたが、俺はツッパっていたのや、格好が悪くて働けるか、意地でも働かない、とっていた。しかし、6月頃から母親がボキッと折れてしまって、何んにも言わなくなった。しょんぼりして『もう働かなくていい。家で遊んでおり』と言う母親の姿がかわいそうで、何とも切なく思えた。母親の気持ちの手前『ファミリーレストランで働く。そこは食事もだしてくれる』とつい出任せを言ってしまった。すると母親は、『それは良かった。晩御飯は作らなくてもいいな。貰った給料は、自分で使っていていいよ』と喜んでくれた。しかし、翌日から夕方になると家を出るものの、お金はないし、食べる物はないしで、本当に困ってしまった。友達の家を1軒ずつ回り、借金したり、ご飯を食べさせて貰っていたことがバレて良かった。バレなければ、どないしようかと思っていた…」と言うのです。その後、しばらくして母親から、「あの子が仕事を変わりたいと言っている。」と電話がありました。彼は、仕事をしていなかったことを言えなかったのです。現在は、借金も全部返して、真面目に働いております。もし、あの時、怒って「お前、何ということをするのや」と言えば、この子への対応を誤ることになるのです。

### <自然な結末>

このように、子どもは、親や教師に向かって行動しているのです。学校の中で問題をおこしている子どもは、まず教師に向かって動き、そしてクラスの中に自分の居場所を見つけるのです。家庭で起こっている問題は、学校で処理できないように、学校で起こっている問題は家庭で処理できないのです。学校で起こっている問題だからこそ、幸いにも学校で処理できるのです。

我々がカウンセリングできるのは、テクニックは別として、我々は、子どもと全く利害関係がないからです。私が、100%子どもの味方になったところで、私自身は何も困らないのです。でも、学校の先生方は、自分自身の学校での立場もあり、100%子どもの側に立つことは、きれいごとで無理なのです。個々の子どもにカウンセリング的アプローチをする前にクラス全体への対応を考えることが大切だと思います。つまり、具合の悪い行動をする子どもに、特別に接するよりも、あたり前に行動し、あたり前に振舞っている子どもにどのように接するかの方が大事なのです。

先生方に、「宿題を忘れる子どもをなくするのにどのようにすれば良いか？」と聞かれたことがあります。私は子どもが宿題を持って帰って勉強するのは基本的に反対ですが、そう固いことばかり言っておけませんので、「宿題をやってきた子どもにどのように接していますか。やってこない生徒にどのように接していますか？」と尋ねたのです。宿題をやってこない生徒に、1回や2回は、何を言ってもよろしい。しかし、10回、20回と言っても宿題をしてこないのは、何十回と宿題のことを言うからこそ、だからこそ、子どもが宿題をしてこないのだと考えた方が良い結果がでできます。

子どもにある働きかけをしても、事態が変化しなかったら、そのアプローチを続けると事態が改善すると思うよりも、変化しないと考える方が科学的なのです。だから、宿題をしてきた子どもにしっかりとつながり、宿題をしてこない生徒には知らん振りをする、という実験を一度してみる価値があるのです。事実、何人かの先生方が実験をして下さいまして、完全にはなくなりませんが大変良い成果を上げています。

次に、今、起こっていることは、一体誰の責任で解決すべき課題なのか、また、その行為の結末が誰に振りかかってくるのかも考えていただきたいのです。勉強しなければ誰が困るのか、宿題をしなかったら誰が困るのか、忘れ物をしたら誰が困るのかをはっきりさせておきたいと思

ます。あなた方が勉強しなくても、宿題をしなくても、私は少しも困らないことをとてはつきりさせておきたいのです。そここのところから、子ども達は、勉強することや忘れ物をしないことが自分達のためにしているのだと気付いていくのです。しかし、親も教師も、子どもに勉強させるのは自分達の仕事だと思いこんでいるのです。子ども達が勉強しやすい環境を作ること、彼らに発達段階に応じた教材を与えること、そして分り易く説明していくのは先生方の仕事です。それを使って、自分自身を成長させていくのは子どもの仕事です。教師の仕事と子どもの仕事を混同してはいけません。教師は教師としてベストを尽くし、ベストを尽くした教師に向って、子どもはベストを尽くさなければいけないのです。子どもがベストを尽くすということは、子どもが自分の人生に全部の責任を取ることです。そこを不必要に援助を与えると、子どもは自分の人生は誰かが手伝ってくれる、誰かが支持してくれるという構造の中でどんどん無責任になっていくのです。

### <登校拒否>

私は、登校拒否児を沢山扱ってきましたが、彼らが立ち直っている様子を少しお話します。まず、我々のところへ子どもが来たら2～3ヶ月寝させてやります。彼らは、家でも傷つけられ学校でも傷つけられてボロボロになっているのです。しかし、まだ、学校に居場所がなくとも、家庭には、若干居場所があるのです。家でガミガミ言われるけれども、まだ学校より家の方がましだと、登校拒否児ができるのです。ところで、登校拒否児にとって、親や教師が紹介してきたカウンセラーは、敵の味方になりますので子どもにとっては完全な敵になります。カウンセラーは、プロの敵ですから、これ以上敵が増えるのはかなわないとばかり、登校拒否している子どもは我々になかなかつかないのです。そんな状態であっても、2～3ヶ月の間、親を徹底的に思想改造いたしますと鬼のように見えていた母親の態度が変化してきます。そうすると、あの鬼婆を、ここまで変えたのは、どんな人だろうかと見にきます。見に来たときに、「ああ来たか、来たか」と話かけると、きっと来なくなります。見に来て何もしなくて、知らん顔しておきます。「これは不思議な奴だ」と思って何度も見に来ます。そのうちに、私のオフィスはじゅうたん敷きになっておりますので昼寝などをはじめます。家で昼寝をすると文句を言われますが私のところでは、何も言われませんので、心ゆくまで昼寝ができます。登校拒否児が時によっては、5～6人アザラシのようにゴロゴロ寝っ転がっています。私は、アザラシ村の親分と言ったところです。2～3ヶ月寝転んでいきますと、彼らも段々と元気になってきて「先生、どないしょう」と言ってきます。向こうから言ってくるまで、「わしは知らん。登校拒否をしても私は少しも困りません。あなた方があなた方自身の人生を食い潰すのは、あなた方自身の問題であって、あなた方が食い潰せばよろしい。食い潰したくなかったら、いつでも相談に来なさい」と言って、絶対相談に乗らないようにしているのです。相談に来れば、人生や学校をどう思っているのか、具体的には35才頃に何をしたいのか、それを決めてもらいます。そして、そこから逆算して、そのために今何をしなければいけないのかを決めていくのです。例えば「商売をしたい」と言えば「では、その前に何をしなければいけないのか、どんな学校へ行かなければいけないのかを知っているか」と次第に現実近づけていくのです。最終的なゴールがあって、そのために学校に行かなければならない、卒業証書が自分の将来の設計と関係があると思うならば学校へ行きます。中学卒業で十分やっつけられる職業につきたいと思ったら、無理に高校まで行く必要はないのです。要するに、学校は道具であって子どもがその主人公なのです。教育は手段であって、目的は教育が終わってからあるのです。「学校教育は、あなた方の人生における一つの手段にすぎないのです。

あれは、あなた方の道具ですから使い方を工夫しなければならない。学校の先生は、横暴やからあなた方を使いよるが学校に絶対に使われたらあかん。卒業証書が、要るのか要らないのか。学問が要るのか要らないのか。まず、そこを考えようや」と話してやるのです。35才頃に何をしているかを考えて、今学校へ行かなければ、自分の将来構造が実現しないと思った子は学校へ行きます。以前と違って、学校が完全に手段になったからです。

## <発想の転換>

次に、今の学校は子どもの発達が違っているのに、同じ内容で、同じ教材で、同じ方法で学習していることも少しおかしいのではないかと思っております。新制高校のできた頃の進学率は、40%足らずでしたが、現在は90%以上の生徒が進学しているのです。だから、高校では近くが勉強についていくのがしんどいのです。中学校でも、半分ぐらいの生徒は、学習内容について行こうとすると大変なのです。どうして小学校の二年生で九九を習って、全員が理解しなければならないのか。中学一年生で一次方程式を習って、全員が理解しなければいけないのか。中学一年生と言っても、ピンからキリまであって、その能力は7、8才の子どももいれば、16、7才の子どももいるのです。それが、同じ内容で、同じ教材で、同じように学習するのは平等ではないのです。

我々カウンセラーは、10人の子どもがいたら10通りのアプローチを考えます。決して同じことはしません。今の公教育の場で、個別アプローチが出来にくいことも知っているのですが、だからと言って、同じことを同じように、きちんとしなければならないという発想を持っていると全部失敗するのです。ある学校で1学期の間、子どもがプールに一度も入れなかったクラスがありました。整列して駆け足をして、全員がピタッと揃うまでプールに入れたい担任がいたのです。これは、典型的に誤った姿勢です。全員が一緒になければならない理由は何もないのです。

幼稚園の先生方から、「食事の遅い子がいる、お早ようございますが揃わない」と相談を受けます。不必要にダラダラ食べているのは、何とか指導しなければいけないが、努力しても食べるのが遅い子に、無理に早く食べなさい、と言うのは昔の軍隊と同じファシズムです。

「お早ようございます」とみんなが揃うまで何回もやらしているとどんな結果が起こるかという遅れて言っている子は皆から憎まれます。みんなを一緒にさせようと思えば思う程、連帯責任を取らせようと思えば思う程、クラスの中は分裂するのです。いつも遅くなる子は、クラスの人から憎まれ、先生からは疎まれることでしか私はこのクラスにおられないと思っていくのです。クラスの中で、いじめられっ子として存在するのです。先生方は、みんな仲よくという考えが好きなのですが、こんな惨めな所属のさせ方をしてはいけなくて少し発想を変えてみませんか。

この間も、ある先生が林間学舎へ行くための班をくじ引きで作ったのです。そしたら、無茶苦茶に仲の悪い子が同じグループになってしまったのです。「先生、どないしましょう」と言うのです。私は「どうしてくじなんかで班を決めるの。はじめから好きな者同士でグループを作ればよろしいのに」と言いますと、「そうはいきません。みんなが誰とでも仲よくしなければ教育は成り立ちません」とその先生は言われるのです。私は、私自身が誰とでも仲よくなんかできないので不思議に思いました。10人中、2人ぐらいは好きな人がいる代りに、1人ぐらいは嫌いな人がいるものです。残りの7人は、その時次第です。「みんな仲よくなどという教育目標は、現実不可能だから、もっと現実可能な目標を掲げればいい」と私は言ったのです。その先生は「理屈は分かった。でも好きな子ばかり集まると、誰からも好かれないうちが一人になってしまう」と言われるのです。その時は先生の出番なのです。みんなから仲間はずれにされている子がいた

ら、一番社交的な子どものいるところに行って「この子入れてやって」と言えば、その子ども達は責任を持ってやってくれるでしょう。その子達にとっても、人から嫌われている、付き合いの悪い子どもとの付き合い方を学ぶチャンスになるのです。

今日、私が言ったことは、少し技術論に過ぎるかも知れませんが、先生方にはこのような工夫が足りないのではないかと思います。勿論、学校教育の中で、子ども達に対する愛情とか情熱は大切です。先生方は、皆さんそれを持っておられます。持っていないと教師失格です。しかし、技術のない愛は実際の役に立ちませんし、また時に危険なものです。先生方が、常々教育に対する情熱とか、子どもに対する愛情を持っておられるのはよく分かりますが「こんな時にどうすればいいのか」という技術論をもう少し研究されて、お互いに交換なされればいいのではないかと思います。長時間、ご静聴ありがとうございました。

## 更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載